

私の風土記

今村 雄二郎 (株式会社アイヴィス 名誉顧問)

第一章

学生時代

昭和23年(1948年)頃、旧制の専門学校(現武蔵工大)の電気工学科に籍をおいていた。その頃の学校は、半分ぐらいが復員した元軍人や軍の学校から入学した学生で、陸軍や海軍の軍服を着ており、学生服など着ている者は少なかった。私自身も軍とは無関係であったが、やはり海軍の作業服のような物を着ていた。

仲の良かった小坂三郎は、私より3歳年上の予科練出の元上飛曹で、ゼロ戦のパイロットであった。が、運良く特攻隊編入は免れたとのことだった。彼はなかなかのダンディールックで、海軍の戦闘服に半長靴をはいており、大いにモテていた。

終戦までの1年半、私は勤労働員で通った工場で通信機の生産を手伝っていた。自然と電子、電気の方面に興味をもつようになって、学校を卒業した。

卒業後すぐには就職もせず、ふらふらしていた。兄が東大のボート部に入部していたのに影響され、東大理科1類を受けたが落ちてしまった。

慶応の工学部に入り、かくなる上はと、すぐにボート部に入部した。当時、慶応のボート部は、東大・早稲田・一ツ橋と並んでビッグ4といわれていて、入部直後、全日本インカレのエイトで優勝した。もちろん、当時私は新人で、対抗クルーには乗れなかった。

優勝クルーからコックス(舵取り)と漕手4名が選ばれて、ヘルシンキのオリンピック選手候補になったが、その穴埋めで、私は2年の初めから対抗エイトのメンバーに選ばれることになった。

春は墨田川の早慶戦6000メートルを三年間漕いだ。当時の隅田川には護岸工事やコンクリートの堤防などはなく、柳橋の料亭等、宴台が川に張り出しており、芸者達が総出で応援してくれたものである。

夏は戸田橋のボートコースで全日本選手権があり、おおよそ一年のうち四ヶ月は合宿していた。当然学業に影響してしましたが、同級生の内山や相磯(後の理工学部教授で、加藤寛さんとともに、藤沢の大学院を作り、現在は東京工科大学学長)からよくノートを借りたり、代返とかで、何とか期末試験をしのぐことができたのである。

(次頁に続く)

3年の夏休みは少し心を入れ替え、全日本インカレへの参加をあきらめ、主任教授のお世話で、日本電気、多摩川事業所で実習を始めた。実習の内容は、米海軍から貸与されたフリーゲート艦に搭載された、電波傍受用の自動チューニング受信機の調査である。なかなか興味あるテーマを提供され、だんだんと調査研究に熱が入ってくるのもつかの間、ボート部の高橋監督（通称六さん、昭和7年ロサンゼルスオリンピックのボート代表メンバーで、当時は大日本精糖の部長で藤山愛一郎の秘書）から突然呼び出しがかかり、直ちに合宿に戻れということになった。せっかく始めた実修の中断について、工学部の先生や日本電気の実修担当の上司には何ともマズイ結末で、平謝りではすまされぬ破目に陥った。

そんな状況で、全日本インカレの決勝に残れなかった、にも拘らず翌年は最上級生になるということで、一度は辞退した主将を引き受ける事になった。

4年の夏にはボートレース発祥の地の大学と言われた、英国ケンブリッジ大学のエイトクルーが日本に遠征してきた。幸いにして、私は現役最後のレース朝日レガッタ（決勝4ハイレース）で、このケンブリッジ大・東大・早稲田を抑えて優勝する事ができた。

私の人生では色々な紆余曲折を味わってきたが、最初の就職面接もそうであった。私は電力会社に入りたいと言っていたのを、一年後輩の宮川が彼の父（間組役員で、只見川の電源開発等で、東北電力と付き合いがあった）に話した結果、ケンブリッジ大のOBであり、当時東北電力の会長をしていた白洲次郎のところに連れて行くという事になった。ところがである、私は不覚にも待ち合わせ場所を間違え、その面接に30分の遅刻をしてしまったのである。理由の如何にかかわらず、有名な直情ワシマンの白洲次郎に対しては、当然のことだが、これは面接落第の十分な条件であった。